

彼がここへ

やって来たのは

一九三六年。

四十三才から

三十三年間

ここでの暮らしを

スケッチブックに

書き留めてきた。

スケッチーズ

八瀬の石黒さん家から
見た世界

石黒宗麿
八瀬築窯から90年目

2025年
6月27日(金) — 8月3日(日)
京都精華大学ギャラリーTerra-S

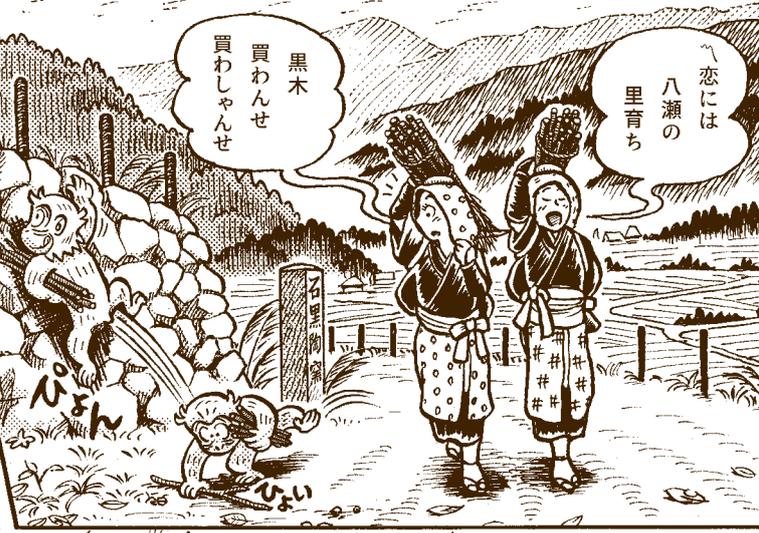
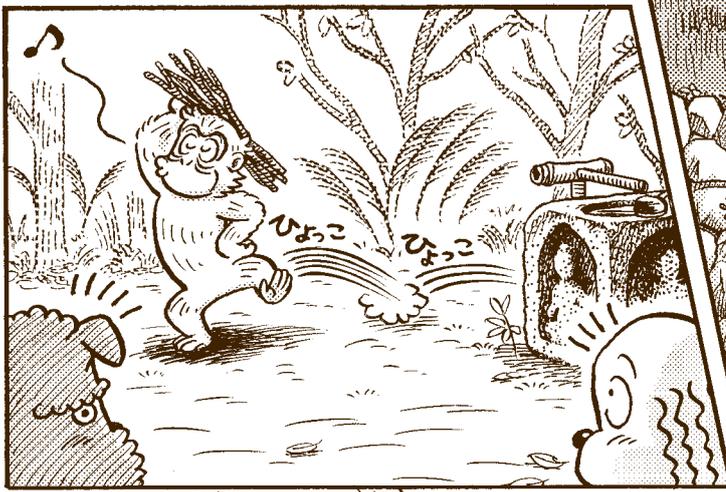
11時—18時 入場無料
日曜休場(但し、8月3日(日)はオープンキャンパスのため開場)

主催 京都精華大学
企画 京都精華大学伝統産業イノベーションセンター、京都精華大学ギャラリーTerra-S
助成 公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団
協力 射水市新湊博物館、京都市左京区役所八瀬出張所、日本玩具博物館、
路上観察学会40周年記念事業「路上観察よいつまでも」

Sketches
Views from
Ishiguro's Porch
in Yase

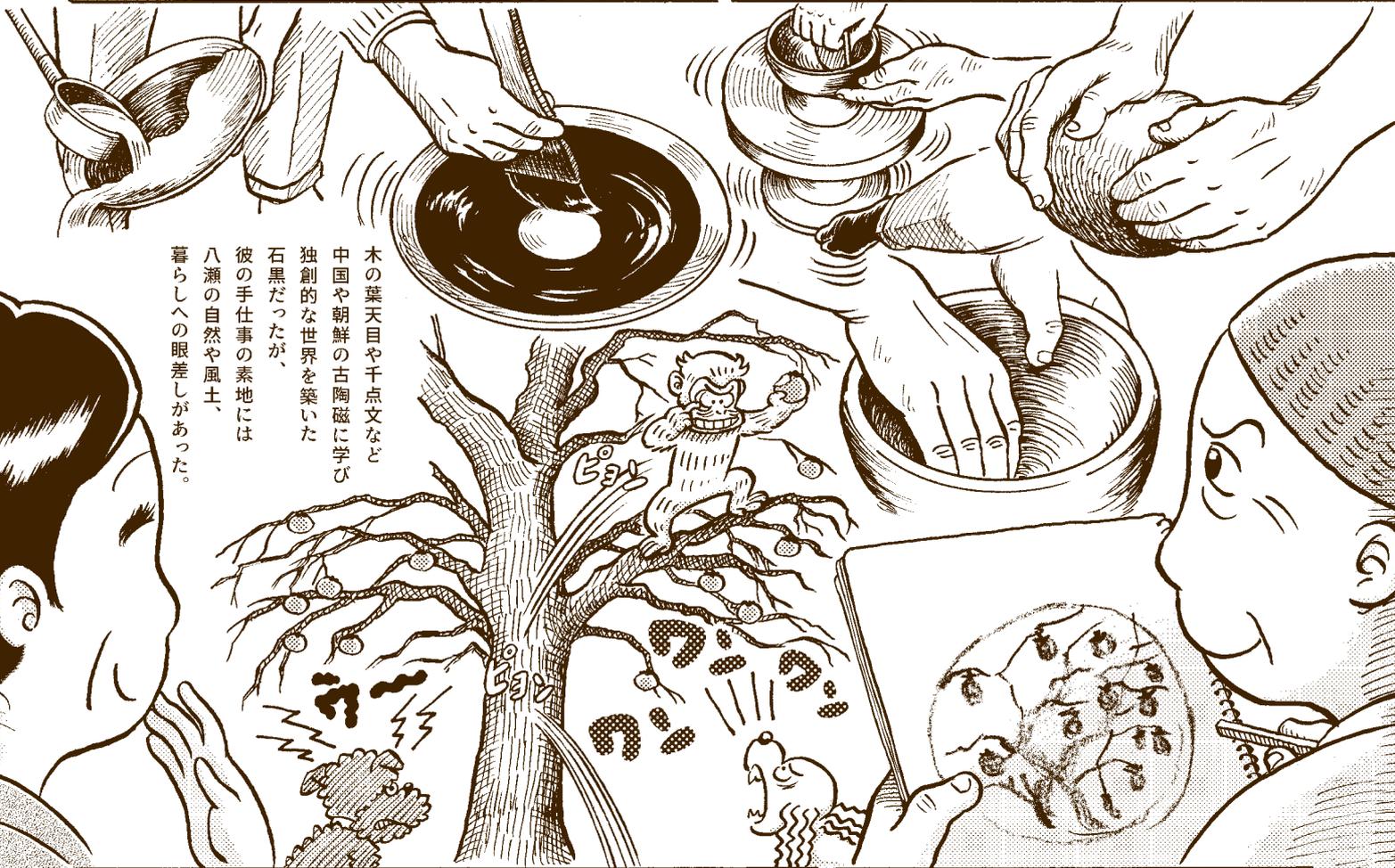
京都精華大学ギャラリーTerra-S 前期企画展





黒木
買わんせ
買わんせ
買わんせ

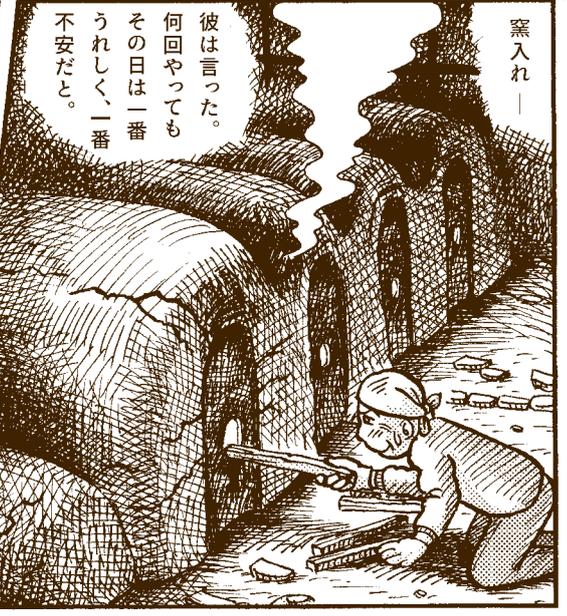
八瀬の
里育ち
恋には



木の葉天目や千点文など
中国や朝鮮の古陶磁に学び
独創的な世界を築いた
石黒だったが、
彼の手仕事の素地には
八瀬の自然や風土、
暮らしへの眼差しがあった。



窯出し
庭には叩き割った
白い陶器の欠片が
うず高く積もるが、
柿の実
赤く熟してハ
珊瑚のように
輝いている。



窯入れ
彼は言った。
何回やっても
その日は一番
うれしく一番
不安だと。

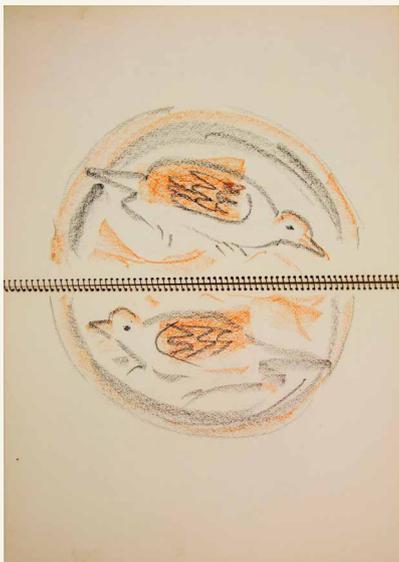
* 石黒宗磨の漢詩《十年一日徹異端》より

スケッチーズ

八瀬の石黒さん家から見た世界

陶芸家 石黒宗麿の家は、八瀬の端っこにある。石黒さんは、よく縁側に腰を下ろし、庭を見ながら思索に耽^{ふけ}っていたという。ここからどんな景色を見ていたのだろう。正面には比叡山の山並み、庭では妻のとうさんが菜園をし、犬たちが駆け回っている。季節ごとに梅や桜、柿、椿が色づき、鳥たちがさえずる。麓の街道に目を向けると、大八車を引く人々や柴を担いだ女性たちが行き交う。

石黒さんのスケッチブックには、そんな八瀬の景色が何枚も描かれている。けれど、その膨大なスケッチを見ていると、八瀬という土地の風土や風習を描きながらも、ここではないどこかの景色を描いているようにも思えてくる。というのも、スケッチの多くは景色を写生したものではなく、皿や壺に合わせた図案へと展開されているからだ。石黒さんは、山あいの八瀬での暮らしを描き留めることで、どこでもない世界を描き出そうとしたのかもしれない。



鳥のスケッチ (1963年頃)

とはいえ、残されたスケッチを眺めているだけでは、どうして石黒さんがそれらの景色を描いたのかが分からない。そこで、学内外の作家や研究者に声を掛け、石黒さんが暮らした「八瀬陶窯」でしばらく時間を過ごすことにした。家屋や庭の掃除をしたり、縁側に座って地元の方から話を聞いていると、ふいにそのスケッチが描かれた背景が見えてくる。そうやって石黒さんとの対話を重ねていると、いま、ここから見える世界を描いてみたくなってきた。本展では、石黒さんのスケッチをはじめ、陶芸・建築・庭景・集古・玩具という5つのチームが描き出したスケッチたちをお見せしていく。



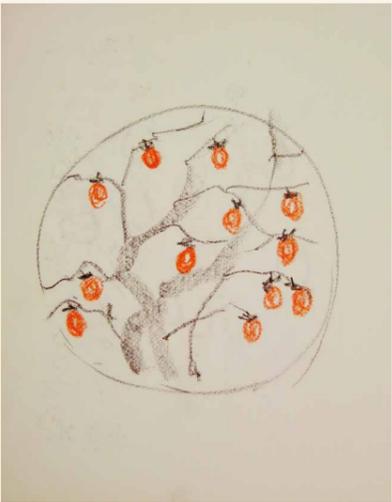
石黒宗麿と八瀬陶窯 (1956年頃、射水市新湊博物館提供)

石黒宗麿と八瀬陶窯

石黒宗麿 (1893-1968) は、1936年に京都洛北の八瀬で窯を築き、晩年までこの地を拠点に作陶を続けた。中国や朝鮮の古陶磁に肉迫しつつも、独自のエスプリを持った陶芸家として知られ、1955年に鉄釉陶器の技法による重要無形文化財保持者 (人間国宝) に認定された。1956年には「財団法人八瀬陶窯」を設立し、後進の陶芸家の研究の場となることを望んだ。没後、関係者の管理を経て、2003年から京都精華大学が施設管理を行う。2018年に本学伝統産業イノベーションセンターにて「八瀬陶窯プロジェクト」を発足。2023年には工房のある家屋を修繕し、実地的な石黒宗麿の研究拠点として運用している。

八瀬の石黒さん家 から見た相関図

石黒さんのスケッチを手がかりとした5つのチームの制作や研究は、ゆるやかに影響し合いながらひとつの相関図を描き出した。
*石黒宗彦のスケッチブック(全て射水市新湊博物館蔵)は、各チームの作品とともに展示されます。



柿の木のスケッチ

(1965年頃)

石黒さん家の縁側に腰を下ろすと、目の前に柿の木が見える。スケッチとは少し枝ぶりが違う。葉が落ちた晩秋の頃、石黒さんは丸い皿の図案に合わせて描いたのかもしれない。ここ数年は、柿がまだ青いうちに実が落ちたり、サルに喰われたりして、赤く実った柿を見たことがない。

枯木とカラスのスケッチ

(1965-66年頃)

枯れた木にカラスが留まっている。脇には「寒鴉枯木」と漢詩の詩題が添えられている。石黒さん家の庭で、枯れた木にカラスが留まっているのを見たことがある。けれど、このスケッチがこの庭を描いたものかわからない。今では見上げるほどの大木も、かつてはこれくらいの高さだったのかもしれない。



陶芸

木村隆 (釉薬研究)

田中大輝 (陶芸家)

中村裕太 (美術家)

石黒宗彦の
釉薬調合

石黒さん家の犬

石黒宗彦の陶片

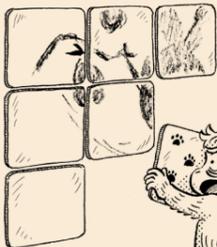
大原女人形

武井武雄『日本郷土玩具』
(1934)

武井武雄
《ムギワラザイク》
(1928)

西澤笛畝『うなるの友 八編』
(1921)

野鳥



比叡山

菜園と野草

柿の木



スケッチタイトル

八瀬の麦藁人形

饅頭喰い人形

有坂与太郎『伏見人形』
(1929)

伏見人形



柴を担ぐ女性たちのスケッチ
(1961-62年頃)
石黒さん家の麓の街道には、柴を担いだ大原女や小原女(八瀬女)が行き交っていた。石黒さんはそういう女性たちのスケッチを何枚も描いている。けれど、あまりにもこの土地の風物であったためか、その題材を描いた陶器はまだ見つからない。

八瀬の石黒さん家

庭景

石川知海 (御庭植治)

山本麻紀子 (アーティスト)



庭木の剪定

柿の木

わら縄



石黒さん家の
生活道具

陶器の版画

八瀬陶窯の書割

今和次郎『日本の民家』
(1919)

茅葺屋根の民家

集古

菊地暁 (民俗学)

松元悠 (版画家・美術家)

麥生田兵吾 (写真家)

八瀬の民俗と
観光



滋賀坂本の陶器

八瀬の陶器

八瀬陶窯の
生活陶器

八瀬陶窯周辺の
石たち



石の写真

坂道と垣根

床の間

路上観察学会《キリコ塀》
(1986)

西山卯三『住み方の記』
(1965)

瀝青会『今和次郎「日本の民家」再訪』
(2012)



建築

恵谷浩子 (風景学)

諏佐遙也 (模型製作)

本橋仁 (建築史家)

民家のスケッチ

(1942年頃)

茅葺屋根のてっぺんから煙がモクモクと出ている。どうもこのスケッチは、実際の建物を見ながら描いたものではなさそう。石黒さんは、頭のなかにある理想の民家を描き出したのかもしれない。だから、墨書きされた建物のパースはどこかおかしく、ハリボテのようだ。

玩具

尾崎織女 (日本玩具博物館学芸員)

軸原ヨウスケ (デザイナー・玩具工芸社)

長友真昭 (玩具作家・玩具工芸社)

山名伸生 (玩具蒐集家)

関連イベント

手仕事の学校1

八瀬の民俗・民家・

風景・路上観察

民家や風景、路上から八瀬をみつめるトーク&ワークショップ。民家にみる習慣とものづくり文化や、景観にみる地域の風土についてお話しします。またゲストに林丈二氏をお迎えし、一緒に八瀬を歩くことで、路上に隠れたものの面白さを探っていきます。

日時 7月12日(土) 13時-17時

会場 八瀬陶窯

定員 20名

*要申込み・先着順・無料

トーク1

「八瀬の民俗と民家

(今和次郎、西山卯三、路上観察、瀝青会)」(1時間)

菊地暁

トーク2

「八瀬陶窯と八瀬の風景」(1時間)

恵谷浩子

ワークショップ

「八瀬の路上観察」(2時間)

林丈二(路上観察学会・イラストレーター・エッセイスト)

ファシリテーター 本橋仁

手仕事の学校2

八瀬陶窯の庭・

玩具のデザイン

トーク1では、八瀬陶窯の庭の植生を観察し、庭に向けられた石黒さんのまなざしを探ります。トーク2では、かつて八瀬周辺で作られていた麦藁人形や、土人形の源流である伏見人形のデザインについてお話しします。ワークショップでは、麦藁と和紙を用いて八瀬の麦藁人形を作ります。

日時 7月13日(日) 13時-17時

会場 八瀬陶窯

定員 20名

*要申込み・先着順・無料

トーク1

「石黒さんのスケッチと庭」(1時間)

山本麻紀子・十石川知海

トーク2

「玩具工芸とデザイン」(1時間)

軸原ヨウスケ・長友真昭

ワークショップ

「八瀬の麦藁人形を作る」(2時間)

尾崎織女

ファシリテーター 米原有二

なかよしトーク

ビヨンド・ザ・

『アウト・オブ・民藝』

ひとびとが日々の暮らしの中から作り上げた民具・民藝・郷土玩具といったモノをめぐって、アートとガクモンのアプローチには、どのような違いがあり、どのような分担や協力が可能なのか？

軸原ヨウスケと中村裕太によるリサーチプロジェクト『アウト・オブ・民藝』から今回の「スケッチーズ」に至る経緯を紹介し、アートとガクモンの理想的距離感を考えます。

日時 7月11日(金) 19時-18時半(開場)

会場 京都精華大学明窓館4F

登壇 軸原ヨウスケ・中村裕太

コメンテーター 角南聡一郎(神奈川大学)

司会 菊地暁 定員 60名

*申込み不要・無料

共同主催 京都民俗学会

オープニングトーク

日時 6月27日(金) 18時半-19時半

会場 京都精華大学ギャラリーTerra-S

*申込み不要・無料

ギャラリートーク

日時 7月26日(土) 14時-14時半

会場 京都精華大学ギャラリーTerra-S

*申込み不要・無料

問合せ

京都精華大学ギャラリーTerra-S
〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137
京都精華大学明窓館3F
TEL: 075-702-5263
FAX: 075-702-8819
E-mail: gallery@kyoto-seika.ac.jp
https://gallery.kyoto-seika.ac.jp/

アクセス

叡山電鉄鞍馬線「京都精華大前」駅下車、徒歩で3分
地下鉄烏丸線「国際会館」駅下車、3番出口より
スクールバスで約10分

*駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。



企画担当 | 伝統産業イノベーションセンター (中村裕太 [本学芸術学部教員]、小出麻代)、ギャラリーTerra-S (齋藤雅宏)

運営担当 | 伝統産業イノベーションセンター (米原有二 [本学人文学部教員]、フォック・チン)、ギャラリーTerra-S (伊藤まゆみ) マンガ | 谷本研 テキスト | 中村裕太